

が実施できる独自のオンラインプラットフォームを用いた信念や価値観の測定・分析ツール。

3-2. プロセス評価

3-2-1. 目標値の達成状況

「大学の国際展開力強化事業」の申請書に則り、2023年度の数値目標は提携校数2校、派遣学生数15名、受入学生数15名、派遣と受入の日数はそれぞれ10日程度であった。これらの目標に対する実績は、提携校数2校（シンビオシス国際大学、レスター大学）、派遣および受入学生数は10名ずつで計20名、それぞれが8日間の現地演習を含む10日程度の渡航日程でプログラム実施を完了し、数値目標を達成したと言える。

学習のプロセスとして重要である現地演習の事前事後学習をオンラインで行う計画についても、Zoomを用いて3カ国（日本、インド、イギリス）の学生が合同で集うオリエンテーションや、Google Classroomでのオンデマンド学習を通して機能的に実施できた。特にメタバース（oVice）を学習のプラットフォームとして利用した点には本学の他の留学プログラムにはない独自性が表れている。次年度以降は、事前学習におけるJV-Campusの更なる活用を目指している。

また、GRIPプログラムの特徴のひとつは学部や研究科等の専門性、並びに学部生から博士後期課程の学生まで学年を問わないインタープロフェッショナルなチームで課題に取り組む点である。今年度は、千葉大学では看護学部、看護学研究科（博士前期課程）、医学部、ならびに非医療系である国際教養学部、教育学部、工学部の学部生と大学院生が混在したチームを形成し、通常の授業では経験することがない編成でのプログラム参加が叶った。一方、シンビオシス国際大学からは、今年度は看護、デザイン、Arts and commerce専攻の学生が参加し、チームメンバーの多様性という点で昨年度よりもプログラムの趣旨に合致する編成となった。レスター大学は初年度である今年は医学系学部に絞り、医学専攻の学生と助産専攻の学生を受入れた。次年度は、数値目標（提携校数3校、派遣学生数20名、受入学生数20名）の達成を目指すと共に、学生の多様性を拡大し、よりプログラムの特徴を活かした学習経験を図る。

3-2-2. 協定校およびフィールドからの評価

シンビオシス国際大学、レスター大学、並びに、9のフィールドのうち3組織/施設の連絡担当者より、今年度のトライアル実施までの準備および当日の運営について、良かった点と改善すべき点のフィードバックを得た。得られた回答は以下の通りである。一部、組織/施設が特定されないよう表現を加工した。

良かった点

- オリエンテーションで体験でまち歩きをする前に、(災害マップ)アプリの操作方法をお伝えすることが出来たこと。[フィールド]
- 昨年度と比較するとインドに加えて英国からも来訪があり3カ国間の意見交換ができたことができた。見学に終始するのではなくディスカッションの時間を多く持てた。[演習サイト]
- 日本(地域)の取り組みを留学生に紹介できたこと。また、留学生(の視点)から日本の取り組みに対する質問や意見がもらえたこと。[フィールド]
- インドでは実際に地域に住む方から直接話を聞くことが出来た。実際の声を聞くことで、インドという異国の地での生活の実態を少しではあるが知ることが出来たように感じる。また、全ての場所で歓迎していただき、快くインタビューに答えていただいた。そこから学んだことは非常に多かった。[千葉大学生]
- 充実したスケジュールかつ土日は旅行など観光もできた点。期間もちょうどよかった。[千葉大学生]
- 質問に対して真摯に素早く反応していただけた点。[千葉大学生]
- As part of the social capital team, I was able to get a real feel for Japanese culture and was able to immerse myself in it. (社会資本チームの一員として、私は日本文化を肌で感じることができ、その中に没頭することができました。)[留学生]

改善できる点

- GRIPプログラムをよく理解できておりませんのでコメントは差し控えます。逆に言えば、GRIPプログラムをもっと理解したうえで参加できるとより効果的だったかもしれません。[フィールド]
- 安全に過ごすためには仕方がないのかもしれないが、インドでの食事や休日の過ごし方まで全てが決められており自由が少なかった。キャンパスの位置的に難しいかもしれないが、もう少しインドを「探検する」経験をしたかった。[千葉大生]
- 日本でのプログラムの充実度が低いように感じた。特にここから何を学ぶのかということが明らかにされていなかったり、専門性の高い方からの話がなかったり、ただ歩くだけの時間が長かったりすることは改善が必要と感じた。インドではこのプログラムに参加するための選考が難しいと聞いた。プログラムから多くのことを学んでもらうためにも、フィールドワークの訪れる場所やその場所での説明をする人の見直しは必要であると感じた。[千葉大生]
- インドでは地域に住む人やNGOで働く人から話を聞くことで学んだことが多かった。そのため日本に来た学生にもそのような機会をもっと提供してあげて欲しい。何日間かあるフィールドワークの中で、そこで働く人とディスカッションできた日が1番いい日だったと言っていた。もっと人から学ぶ機会を提供した方がいいプログラムになると感じた。[千葉大生]
- レスターの学生との交流が夕食1回しかなかったのもう少し現地で交流したかつ

た。内容や講義など医療系にとっても偏っていて、非医療系学生が難しそうな場面があった。また病院見学や講義の際は学生 5 人とも医療系学生と認識されている部分があった。[千葉大生]

- せっかく色々な学生と共に渡航できたので、イギリスにて他分野の先生とお話できる機会があると良いと思いました。イギリスの先生方は皆さん医療系の学生向けに話されている感じがしました。また日本でホームレスについての講義やオフラインでの顔合わせが少しあってもいいなと思いました。[千葉大生]
- wish we had more time as it was an amazing experience that went so quickly! (もっと時間があれば良かった。プログラムは本当に素晴らしい経験で、時間があっという間に過ぎてしまった。) [留学生]

昨年度に引き続き、プロセス評価としては今年度の数値目標を全て達成し、メタバースの利用やフィールドにおける学習プログラムも概ね計画通り達成できたと言える。複数の国からの学生が参加することにより、多種多様な立場から意見交換ができた点を評価した意見が見られた。その一方で、改善を検討すべき点としてイギリスでの現地交流など学生との交流が比較的少なくなってしまうグループでは、より交流できる機会を望む声があがった。また、多職種連携教育プログラムとして非医療系学部からの参加を募っているにも関わらず、医療系学生と非医療系学生を分けられてしまっているという学生の意見も見られた。この点は、このプログラムを運営していく中で、フィールドサイトの受け入れ先に改めて、医療現場であっても非医療職以外の視点も考慮に入れた多職種連携教育であることを、フィールドサイトと準備段階で念入りにすり合わせていく必要があると考える。引き続き、次年度以降も数値的な目標達成とより円滑で学習効果の高いプログラム運営のために検討・検証・改善を続けていく。

3-3. 学習成果の評価

昨年度より連携実践能力および問題解決能力に追加して新たに本年度より Cultural Competency に関する項目を追加している。千葉大生 11 名、レスター大学生 3 名とシンビオシス国際大学生 4 名の計 18 名（男性 4 名、女性 14 名）から、BEVI には千葉大生 7 名とシンビオシス国際大学生 7 名の計 14 名（男性 3 名、女性 11 名）から事前事後 2 時点揃った回答を得た。

3-3-1. 連携実践能力

連携実践能力は、King et al. (2016)による Interprofessional Socialization and Valuing Scale (ISVS-21)^{*1}を用いて測定した（例：I have gained an enhanced awareness of roles of other professionals on a team.）。21 項目 1 次元から成り、0（全くあてはまらない）から 6（非常